

マルクスにおける物象化とヘゲモニー

明石 英人（日本女子大学兼担教員・同附属高校教諭）

マルクスの階級分析は単純な二大階級論としてではなく、社会的諸勢力のヘゲモニー的関係の把握を含むものとして理解されるべきであろう。ここでヘゲモニーとは、政治的・文化的指導と同意の獲得のことであり、グラムシが用いる際の意味内容を踏襲している。このヘゲモニー的視点は、とくに『共産党宣言』第四節や『ブリュメールー八日』などにおいて鮮明に現れているが、ドイツ哲学とプロレタリアートの結合を主張した「ヘーゲル法哲学批判序説」などの時期からつねに保持されていたと思われる。一方、物象化については、「ミル評注」や『ド・イデ』の議論は萌芽的なものである。それは人間の生み出した社会的関係や貨幣が物象として人間に敵対するという指摘にとどまり、物が価値形態のもとで物象化し、さらに物の社会的属性と自然的属性が癒着して現われるという重層性が概念的に把握されたとは言えないからである。その意味で、『ド・イデ』を境に「疎外論から物象化論へ」転換したのではなく、むしろ「物象化論」に到達したのは、1850年代の経済学研究を通じてであると言ったほうがよいだろう（もちろん疎外論的視座は持ち続けている）。ヘゲモニー論的階級分析は、経済学批判における重層的な物象化論と結合したことで、近代社会における「内乱」を総体的に把握できるようになったのである。

『資本論』で用いられる諸カテゴリーは、物象化された近代社会の転倒性を概念的に把握するための道具立てである。このカテゴリー形成にあたって、ヘゲモニー的な要素が抽象されている。たとえば、第一巻第三篇「絶対的剰余価値の生産」では、労働時間や休憩時間などをめぐる具体的な闘争が扱われている。そこでは、労働力の価値量や労働時間の長さは、文化的水準や階級間の力関係によって異なってくるとされ、工場監督官やブルジョア経済学者による政治的・文化的指導とそのせめぎあいが、地主階級の動向や国際情勢と絡めて叙述されている。

こうしたヘゲモニー実践は、当初は物象化された形態の下で展開され、その成果も物象化されている。しかし、人々の社会的実践には、形態の規定に抵抗する精神的・物質的要素がつねに内在している。それに依拠する対抗的なヘゲモニー実践が、物象化を廃棄する実践に発展しうる。以上のようなヘゲモニー論と物象化論の連関について考察する。